滲んだ世界で、見えない言葉を。

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
滲んだ世界で、見えない言葉を。

【Ｎコード】
Ｎ４１６１Ｚ

【作者名】
うわの空

【あらすじ】
休職し、精神科に通う俺と、不登校気味の彼女の物語。
細かい説明を省いている部分もありますので、各々の解釈で楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

俺はあの時、どんな顔をしていただろう。もしかしたら、笑っていたかもしれない。

高校二年の冬、両親が死んだ。殺人事件だった。

見ず知らずの人間に襲われた母、それをかばった父。――二人とも、ナイフで刺されて死んだ。犯人の動機はいたって簡単。『誰かを殺したかったから』だ。それ以上でも以下でもなかった。

通り魔による殺人事件として、しばらくの間テレビで報道された。

路頭に迷う、という表現は間違えているかもしれない。頼れる親戚なんていなかったけれど、頼れる大人が周りにいたことは確かだ。大人（かれら）は、独りになった俺を支えてくれた。けれど、両親を失ったショックは大きかった。どうして俺の親が死んだんだろうと、いつも考えていた。

俺の前を歩いている女性の後ろ姿を、ぼんやりと眺める。歩きにくそうなヒールを履き、のんびりと歩くその姿を。……どうしてそんなに、無防備に歩けるんだろう。この前、通り魔のことが報道されていたはずなのに。

俺は猫背で歩き、常に後ろに怯（おび）えながら過ごすようになった。

あれはいつだったろう。今思えば、両親が死んでから二週間も経っていなかったかもしれない。――彼女が、そう言っていたから。

あの日は、とても寒かった。

公園のベンチがやけに冷たかったことだけ、何故か鮮明に覚えている。

気づけば俺の側に、小さな女の子が立っていた。三、四歳だろうか。彼女は俺の後ろを見上げて、無表情に近い笑顔で言い放った。

「おとーさんとおかーさん、うしろ。ないてる。ごめんって」

それだけ言うと、少女はどこかへ行ってしまった。

どうして、このことを忘れていたんだろう。

ずっと忘れていたんだ。

俺も、彼女も。

4か月前

精神科の待合室で、俺はのんびりとテレビを見ていた。

精神科。その待合室といえば、どんなイメージをもたれるだろう。皆一様に俯(うつむ)いて黙りこくって、泣いてる人もいたりして、この世の終わりみたいな場所……というわけではない。少なくとも、俺の通っている精神(ここ)科の待合室は、内科のそれと大差なかった。

『精神科・心療内科』という看板を掲げているここが、精神科なのか心療内科なのか、俺には分かりかねる。いやまずその前に、精神科と心療内科の違いもよく分かっていない。

そしてぶっちゃけ、そんなことはどうでもよかった。

俺はテレビから視線をそらし、さほど広くない待合室をぐるりと見渡した。夕方四時、いつもなら割と混雑する時間帯だが、今日はそうでもなかった。俺の他に、待合室にいる患者は四人。その一人一人を、俺は素早くチェックした。

一人目は二十代後半くらいの若者で、携帯をいじっている。お洒落なパーカーに腰パンという今時の恰好をしていて、見た限りでは『一般的な』男性だ。

二人目は、イヤホンで音楽を聞いたまま、ぼんやりと壁を見つめている女性。年齢は二十代前半だろうか。時々、鞄の中から携帯電話を取り出して、時刻を確認している。

三人目は、病院に置かれている雑誌に目を通していた。年齢は四十代半ばほどで、男性。読んでいる女性向けの週刊誌には（残念ながら、この病院に置かれている雑誌のレパートリーは少ない）、表紙に赤いマジックで『持ち出し厳禁』と書かれていた。

四人目。俺はその子の姿を見て、心臓がとび跳ねるのを自覚した。今まで何度か見かけたことのある、その顔。

腰まである、長くて艶（つや）やかな黒髪。一言で言うなら、整った顔。けれどその目はどこか虚ろで、いつも宙の一点を見つめている。目の色は茶色と焦げ茶色の間くらい。――彼女の瞳の色を、俺は表現できない。

初めて見かけたその日から、彼女のことがずっと気になっていた。機会があれば声をかけてみたい、とも。ただ、問題点が一つ。

今日もそうだが、彼女はいつだって制服姿だった。黒を基調としたセーラー服。見覚えのあるそれは、この近くにある中学校の制服のはずだ。――そう。つまり彼女は、中学生だった。

対する俺は二十七歳。学生ですらない。声をかけづらい理由は、これだった。

俺がこの精神科に来たのは今から二年前、二十五歳の時だった。仕事によるストレス、そこからきた『鬱病』というのが俺の病名。会社を休み、自宅療養と薬物療法をしましょうというのが主治医の

判断だった。

俺が通院し始めた時にはもう、彼女もこの病院に通っていた。そのころから、一人で。

当初、『精神科のお世話になるなんて……』などと考えていた俺は、待合室の椅子に座っている彼女の姿に目を丸くした。

誰にも顔を見られないよう俯いて、猫背になっている自分が馬鹿らしいと思えるくらい、彼女は堂々としていたから。

「今時、鬱病なんて誰だってなるよ！」

世間ではそう言われ出したものの、いざ通院するとなるとやっぱりいろいろ違うのだ。近所の目というか、周囲の目が気になって仕方がない。……これも、症状のうちの一つなのかもしれないが。

二年間病院に通い続け、俺はようやく社会復帰目前のところにまで来ていた。職場の人間は優しく、『ゆっくり戻っておいで』と言ってくれた。近々、復帰の挨拶に行きたいと思っている。

俺はテレビから流れているクリスマスソングを聞きながら、今年のクリスマスも独りでケーキを食べる羽目になるんだろうなと考えていた。

「職場復帰は来年度、四月からでいいでしょう。約四カ月後ですね」

主治医のてるてる坊主にそう言われ、俺は嬉しさ半分、不安半分で診察室を出た。ちなみに（もちろんというか）、主治医の本名はてるてる坊主などではない。俺が勝手にそう呼んでいるだけで、その由来は……彼の頭頂部が『てかてか坊主』だったからだ。

――四か月後か。二年ものブランクがあるのに、うまく働けるだろうか。

そんな不安も抱えつつ、俺は待合室の椅子に腰かけた。この病院は規模こそ小さいものの薬局を併設しているので、薬を処方された場合は、わざわざ外の薬局に行かなくても院内で受け取ることができる。ただし、かなり待たされる時もあるのだが。

待合室には、俺と、例の女子中学生しかいなかった。他の患者は早々に診察を済ませて帰ったらしい。彼女も薬待ちだろうかと、俺はなんとなく、斜め前にいる彼女の方に目をやった。

目があった。

慌てて目をそらしたのは俺の方だった。まるで、授業中に好きな異性を覗き見ていた男子中学生のような反応。自分自身でもおかしかったが、彼女から見てもおかしかったらしい。忍び笑う声が聞こえてきたかと思うと、

「こんにちは」

向こうから声をかけてきた。

「あ、えっと、……こんにちは」

「ここでよく会いますね。診察のペースは二週に一回ですか」

彼女は臆することなく、俺に話しかけてきた。逆に、彼女よりも年上のはずの俺は、完全にパニック状態だった。

「あ、まあ、そんな感じ」

そんな感じってどんな感じだ。彼女は俺の慌てっぷりを見て、ほほ笑んだ。

「……もしかして、お話しするの苦手ですか？」

「や、そんなわけじゃなくて」

会話する相手が君だから緊張してるんだ、とはさすがに言えなかった。

「よかった。話しかけないほうがよかったのかと思いました」

その時、薬局からしゃがれたおばさんの声で「シンドウさーん」と呼ばれるのが聞こえてきた。彼女は返事をせずに立ち上がる。

『彼女の苗字はシンドウ』という情報を、俺は頭に叩き込んだ。

彼女が薬局で貰ってきた薬の量を見て、俺は驚きを隠せなかった。袋の数を確認したわけではないが、十種類はあるんじゃないか。それらを鞄に放り込む彼女に、

「君も二週に一回、ここに来てるの？」

尋ねてみると、彼女はうっすらとほほ笑み首を振った。

「私は週一、ですよ。……驚きました？　薬の量」

驚いたよと素直に肯定はできなかったが、黙りこむ俺を見て、彼女はふっと笑った。

「主治医が薬好きなのと、私自身に色々症状が出ているせいもあって、どうしても薬の量が増えるんです。不眠、抑鬱、パニック。幻聴幻視その他もろもろ」

「……そうか」

としか返せない自分が酷く情けなかった。

その時ちょうど俺の名前も呼ばれて、俺は自分の分の薬を受け取った。抗鬱薬が数種類と、睡眠薬。全五種類。これでも多い方かと思っていたが、俺の二週間分の薬の量は、彼女の一週間分のそれよりも少ないように見えた。

彼女は俺の投薬袋を見ても、薄い笑みを浮かべているだけだった。

病院から一歩外に出ると、冷たい外気が頬に突き刺さった。スカート姿の彼女は、脚も寒いだろうなと考える。しかし彼女は寒いと声を出すでもなく、紺色のマフラーを首にしっかりと巻きつけると、

「それじゃ、また二週間後に。……ヤマデラさん」

白い息を吐き出しながらそう言って、こちらに手を振った。

俺と同様に、彼女も俺の苗字だけを覚えてくれたようだった。

3か月前　（1）

恥ずかしながら、俺は統合失調症のことをよく知らなかった。だから、例の女子中学生……シンドウさんに、

「私、統合失調症なんです」

とカミングアウトされた時も、正直よく分からなかった。それよりも、彼女がそうやってさらりと自分の病名を口に出したことに驚いた。

大抵の患者は、自分の病気や症状について、話したがらなかったから。

「そうなのか。……えーっと」

「ああ、山寺さんは無理に言わなくていいですよ、病名とか。私が勝手に言っただけ」

彼女は相変わらず、薄い笑みを浮かべていた。

彼女と初めて話したあの日から、一か月が経っていた。前回別れる時に「二週間後に」と言われたものの、すれ違ってしまったらしくて会えなかったのだ。気づけば年も明けていて、彼女と待合室で再会した時の挨拶は「明けました、おめでとう」だった。

「学校は？　もう始まってるの？」

薬を待つ間に当たり障りのない話でもしようと、俺が質問してみると、

「始まりましたけど、登校する気はあまりありません。保健室登校だし、行っても特に楽しくないので」

……当たり障ってしまった感じがした。

気まずさのあまり沈黙した俺。何も言わない彼女。

テレビの音だけが、待合室に響く。

「――消してください。いや、チャンネル変えてください」

そんな中、シンドウさんがふいに口を開いた。

自分の膝の上にある鞄、そこにつけてある熊のマスコットを見ながら。

「え？」

「テレビ」

彼女に言われてテレビを見ると、ちょうど夕方のニュースが始まったところだった。番組トップは、三日前に起こった一家惨殺事件についてだ。黄色いテープと青のビニールだけが浮いているように見える、それ以外は何の変哲もない一軒家が、斜め上のアングルから映し出されていた。

「……嫌いなの？　テレビ」

俺は質問しながら立ち上がり、チャンネルをいじった。待合室にあるテレビは、患者がチャンネルをいじってもいいことになっている。俺が適当にまわしたチャンネルでは、数年前に大ヒットしたドラマの再放送をしていた。

彼女はちらりとそのドラマを見てから、またもや熊へと視線を戻した。

「嫌い。いや、テレビは嫌いじゃないんですけど。ニュース。いや、政治とかは大丈夫なんです。だめなのは殺人。いや、殺人じゃなくても人の命がなくなったようなの、です。ドラマじゃなくて。小説でもなくて。本物の死。誰かの。命が終わった場所。事故、事件」

「……別に、敬語じゃなくていいよ」

怪しげな敬語と言葉を聞いて、俺の笑顔はひきつった。彼女は熊のマスコットをいじったまま、視線を上げようとしない。まるで熊に言い聞かせているかのように、……独り言のように、話を続ける。

「あれが見えるから嫌い。あれが見えやすい。現場を映すのやめてほしい。どうして取材するかな。なんで気付かない。なんで皆、聞こえないんだろう。あんなはっきり、叫び声、猫みたい、いや、もっと。もっとこう」

「えーっと、あの」

「シンドウさーん」

薬局に名前を呼ばれた途端、彼女の独り言はぴたりと止まった。それからこちらを見て、いたずらっぽく笑った。

「……いま、ちょっと引いたでしょ。山寺さん」

「え？」

「山寺さーん」

ちょうど俺の名前も呼ばれ、二人で仲良く立ち上がった。

「誰が差別をしているのか」

帰り道、一か月前と同じ紺色のマフラーをした彼女が、俺の隣で呟いた。どこかでお茶でも飲まないかと誘ったのは俺で、ハンバーガーショップのアップルパイが食べたいと言ったのは彼女だった。ということで、病院から一番近いバーガーショップに向けて二人で歩いている時、彼女が不意にそんなことを言った。

「え、なんて？」

二十七の俺が、中学生をお茶に誘うのはまずかったんじゃないかと思いつつ、俺は出来る限り明るい声で返す。周りから見たら、年の離れたカップルどころではない気がする。

彼女は今日も制服姿だ。もしも同じ中学の生徒や教師にこの現場を見られたら、彼女の立場はまずくなるかもしれないと思った。

「――私たちは、弱者？」

身長百五十センチほどだろうか。百七十五センチの俺から見たら、彼女はひどく小さく見える。俺は眉をひそめながら、彼女の次の言葉を待った。

「私たちは弱者なのだと、本人たちが言う。なのに、区別されると差別されたと言う。都合のいい区別(ごと)だけ受容して、他の区別は差別だと言いはる。『あちら』はあちらで、手をこまねいている。『こちら』のことを弱者だと思っているのかどうかは、知らない。ただ、『こちら』が少しでもおかしな行動をとれば、それは病気のせいだと考える。病気という言葉におさめて、納得しようとする。おかしいね、笑っちゃう」

……俺は、彼女の言葉の一割も理解できなかった。彼女は一人でくつくつと笑う。しかしその笑い声が、何かのスイッチでも切ったかのようにプツリと途切れた。

「山寺さん、幽霊って信じる?」

彼女の声はどこまでも澄んでいて、真剣だった。しかし、いきなり方向転換する話題に、俺はついていけずに振り回される。

「えっと?」

「幽霊って信じる?」

同じ質問を二回され、俺は返答に困った。残念ながら俺には霊感がない。いるかいないかと訊かれれば、正直なところ

「信じてないんだね。その様子だと」

俺が答える前に、彼女の方が言い当てた。相変わらず、うっすらとした笑みを浮かべている。彼女が心の底から笑っている顔を、俺はまだ見たことがなかった。

「……心霊特集で、霊能力者が出てくるでしょう。お祓(はら)いしたりする」

彼女は心持ち首をかしげながら、俺の方を見上げる。ちょうどその時、数メートル間隔で植えられている街路樹が、一斉に光り出した。空はまだ薄明るいのに、青色の人工的な光が点滅する。彼女は幽霊の話を中途半端なところで区切ると、

「――これ、夕方四時になったら光るように設定されてるんだね。もう十二月も終わったのに。クリスマスは関係ないのか。……冬の間はずっと、この調子かな」

青白く光る木を見上げて、ため息をついた。

「光が冷たい。……なにもしなくてもね、木は綺麗。なのに、それを黒いコードでぐるぐる巻きのがんじがらめにして、人工的な明かりをつけて。――何が楽しいのか、私には分からない」

そう呟いた彼女の背後から、イルミネーションが綺麗だと騒ぐ女

子高生の声が聞こえてきた。

3か月前　（2）

夕方のバーガーショップは、高校生で賑わっていた。騒がしいと言い換えてもいい。ガラス戸から店内を覗いてみると、客のほとんどは高校生だった。皆、同じ制服を着ている。この近くに高校があるらしい。

ゲラゲラと品のない笑い声を出す男子高校生を見て、シンドウさんは眉をひそめた。

「……人ごみ、苦手？」

少しだけこちらに近づいてきた彼女に、俺はこっそりと問いかける。彼女は首を振り、

「人ごみと言うよりも、こういう笑い声が嫌い」

誰にも聞こえないような小さな声で、そう言った。

結局、アップルパイとドリンクをテイクアウトして、二人で外に出た。寒いけど大丈夫？　と訊いてきたのはシンドウさんで、俺は平気だよと笑った。実際、分厚いコートを着ている俺よりも、スカート姿のシンドウさんの方がはるかに寒そうだと思った。

バーガーショップの近くにあった小さな公園に、二人で足を踏み入れる。園内には小学生が3人いるだけで、その子たちも俺達と入れ違いで出ていった。

鉄棒に滑り台、ブランコ、シーソー、古ぼけた木製のベンチ。彼女が率先してブランコに向かったので、俺はそれに続いた。

ブランコに座り、アップルパイとホットコーヒーを彼女に渡す。彼女は礼を言ってそれを受け取ると、アップルパイの封をあけた。

俺は自分用の紅茶を取り出す。……が、出てきたのは、ただのお湯入りカップだった。目を丸くする俺に、シンドウさんはほほ笑む。

「ティーバッグ、入ってなかった？」

そう言われて紙袋の中を確認すると、底の方から安物のティーバッグがひとつ出てきた。

――今までコーヒーしか注文したことがなかったから、たまには紅茶でも飲んでみようかと思ったものの、

「……しょぼい。俺もコーヒーにすればよかった」

俺が素直にそう言うと、彼女はくすくすと笑いながらアップルパイを一口食べた。俺はしぶしぶ、安物のティーバッグを湯につけて泳がせる。バッグから徐々に、紅茶の色と香りが漂いはじめた。その時だった。

「――私には幽霊が見える」

彼女ははっきりとした口調で、そう言った。

彼女の言葉と同時に、冷たい北風が吹いた。俺は両手で紅茶のカップを持ち、彼女の方を見る。彼女は相変わらず、どこを見ているのか分からない目をしていた。

「山寺さんは、幽霊を信じていない。けれど、『私は幽霊が見える』。……私の話、本当だと思う？」

沈黙する俺の方を見て、彼女は笑った。雪女を彷彿させる、そんな笑みだった。

「心霊番組によく出てくる霊能力者。あれはインチキだと思うでしょう。それじゃあ私は？　精神科に通っている私は？　精神科に通っている人間が、幽霊が見える、声が聞こえると言ったら？」

彼女は俯き、小さく肩を震わせた。それは寒いからでも、泣いているからでも、なくて。

「ただの幻覚。それが担当医の判断だったし、両親の意見も同じだった」

彼女が声を押し殺して、笑っているからだった。

しばらく、言葉のない時間が続いた。俺が紅茶をすする音と、彼女がアップルパイを食べる音が少し聞こえるくらいの、静寂。それを破ったのは、彼女の方だった。

「信じる信じないは、自由。私が精神科に通っていることも、『壊れて』いることも、本当だから。……あ。言い方が悪かったね、ごめん。壊れているっていうのは、あくまで私の話」

同じ精神科に通っている俺のことを、そして『壊れている』と表現したことを気にしたらしい。謝る彼女に、俺は首を振った。

「君は壊れてなんかない。……幽霊のことは、俺は専門外だから分かんないけど。君は」

「あなたには分からないでしょう？」

俺の言葉を遮って、彼女は言いきる。

「知らないでしょう？　私のこと。君はまだ若いから大丈夫、っていうかもしれない。でもね、もう遅いの。私は壊れてる。ううん、壊れてた。はじめから。欠陥品で、不良品。修理なんてできない」

彼女の声は、諦めているというよりも、事実をただ淡々と話しているだけのようだった。

「……昔から、幽霊が見えてたの？」

俺が尋ねると、彼女は前を向いたままほほ笑んだ。ホットコーヒーを一口すすり、ため息交じりに言う。

「子供のころから、ずっと。けれど物心ついた時から、そのことは隠して生きてきた。精神科に通いはじめたころ、うっかり口を滑らせたけどね」

「誰も信じてくれないの？　君の話」

俺の言葉に、彼女がようやくこちらを向いた。

「優しいね。私の『妄想』に付き合ってくれるんだ？」

「――だけど君自身は、その幽霊を『本物』だと思ってるんだろう？　なら、本物ってことでいいじゃないか」

「……変わった人」

彼女は笑わない。俺ははたと思いつき、恐る恐る彼女に尋ねてみた。

「――俺の両親、もう死んでるんだ。……どうかな。幽霊とか、見える？」

「見えない」

彼女はきっぱりとそう言って、コーヒーを飲みほした。いや、最後の一口分だけ残してある。俺もよく知っているが、この店のコーヒーは、底の方だけやたらと粉っぽくて苦いのだ。

彼女はこちらを、更にその背後を見て、もう一度、

「見えない」

そう言い放った。俺は後ろを振り返る。そこには、『黒いコードでぐるぐる巻きにされていない』桜の木しか見えなかった。

「……守護霊とか、そういうのはいないのかな？」

俺が尋ねると、彼女は首を振った。

「私は見たことない。あのね。死んだ人間の魂って、二週間程度で『消えちゃう』の」

「消えちゃう？」

「成仏、っていうのかな。とにかく、私には見えなくなる」

無表情のまま、首をかしげる彼女。どうやら、『消えちゃう』ことについては彼女も詳しくないようだった。

「二週間程度って言ったけれど、私が知っている限りでは死んだ日からちょうど二週間で消えちゃう。私のお爺ちゃんもお婆ちゃんも、ガンで死んだ叔母さんもそうだったし」

彼女はそこまで言うと、残っていたコーヒーを土の上に流した。乾いた土は一瞬だけコーヒーをはじき、けれどもすぐにそれらを吸収していく。土の上に残った黒いシミとコーヒーの粉を見て、彼女はおかしそうに笑った。げらげらでも、くすくすでもなく、無言で。

「山寺さんのご両親が本当に亡くなってるのなら、二週間以上前に亡くなったのね。二週間以内に亡くなったのだとしても、あなたに『憑いてない』可能性もある。親の幽霊がいつも、子供の側に憑(いる)くとは限らない。フラフラどこかに行っちゃう幽霊もいるし。……もしくは」

彼女は地面のシミから顔をあげて、こちらを見た。

「私のことを試すために、山寺さんがカマをかけたのか。実際、ご両親はまだ生きてたりして、ね」

俺が顔をしかめると、彼女は首を振りながら言った。

「いいの。そういうの、慣れてるから」

「……俺の両親は、本当に死んでるよ。俺が高校生のころに」

俺が小さな声で告げると、彼女は「そう」とだけ答えた。

彼女が俺のことを信用してくれたのかは分からないが、俺の両親が十一年前に死んだのは、紛れもない事実だった。

2か月半前　（1）

Ｆｒｏｍ：高田望
Ｓｕｂ：まだまだ寒いね

風邪とか引いてない？
会社で、風邪が流行ってるの。
山寺君も気をつけてね。

復職、近いって聞いたよー。
楽しみにしてるけど、無理はしないでね。

俺は寝ぼけ眼（まなこ）で、彼女からのメールを読んでいた。寝ぼけていると言っても、今の時刻は昼過ぎだ。恐らく、昼休みを利用してこのメールを送ってくれたんだろう。

高田望（たかだのぞみ）は俺と同い年の同期で、……高校時代の恋人だった。

俺の両親が通り魔事件で死んだあとも、彼女は俺のことを支えようとしてくれた。――けれど、別れてくれと頼んだのは俺の方だった。

「私じゃ、だめかな」

あの時、彼女は泣き出しそうなのを必死に堪えていた。

「私じゃ、君を支えられない？」

そうじゃない。ただ今は、誰かと付き合うとか、そういうのは考えられない。ごめん。

そう返した覚えがある。

結局彼女は女子大に、俺は国公立に進学し、離れ離れになった。もう二度と、会うことはないだろう。そう思っていた。

だから彼女と再会した時、俺は凝り固まった。いや、彼女も凝り固まっていた。再会場所は、社員食堂。――本当に偶然だったのだが、同じ会社に就職していたのだ。

「――……元気にしてた？」

声をかけてくれたのは、彼女の方だった。

「まあね。そっちは？」

「元気だったよ。ありがと」

よりを戻したというわけではない。けれど、高校時代に出来た亀裂は、少しずつ埋まっていった。……亀裂を作ったのは俺で、修復してくれたのは彼女だったけれど。

その後、俺が『体調を崩して』休職すると話した時、彼女は心底複雑そうな顔をした。恐らく、高校時代のことを思い出したんだろう。

「……たまに、メールしてもいいかな」

遠慮がちにそう言われて、俺は笑った。歪ではあるが、その時の俺に出来る精一杯の笑顔だった。

「ああ。そうしてくれると助かる」

そうして約十年ぶりに、彼女とメールアドレスを交換した。

『元気だよ、ありがとう。もうすぐ会社にも挨拶に行くから』という趣旨のメールを返信して、俺は携帯を閉じた。十三時過ぎ。のそのそと布団から這い出ると、洗面台へと向かった。

今日は、通院日だった。

休職してから通いはじめた病院は、土・日・祝日は休みで、平日も十七時までしか診察していない。今はいいが、復職すると通えなくなる。夜間診療、もしくは土日も診察している病院を紹介しましょう、と言われるのはある意味当然の流れだった。

顔を曇らせた俺を見て、担当医のてるてる坊主は笑った。

「安心してください、良い医者を紹介しますから」

残念ながら、俺が心配しているのは担当医が代わることではなくて、彼女と、――シンドウさんと会えなくなることだった。

診察室を出ると、待合室のソファーに座っている彼女の姿が見えた。眉間にしわを寄せて、一点を見つめている。彼女の視線の方に目をやると、『大型トラック歩道に乗り上げ　園児五人が死亡』というテロップが、その背後に事故現場が映し出されているのが見えた。俺は無言でテレビに近寄り、チャンネルを変えた。

「……泣いてた」

待合室には、俺と彼女しかいなかった。彼女は俺に向かって言っているのか、独り言なのか分からない口調で呟く。

「子供たち、泣いてたよ。痛かったって。即死じゃなかったのね。怖かったって」

「声まで聞こえるのか」

「うん」

彼女は俯くと、鞄につけている熊のマスコットをいじり始めた。八センチほどの黒い熊のマスコットには、腕や頭に包帯が巻かれていて痛々しかった。

「……それ、どうして包帯を巻いたの？」

俺が尋ねると、彼女が顔をあげた。その瞬間は無表情だったが、俺と目が合うとほんの少しだけ微笑んだ。

「私が巻いたんじゃない。はじめから巻かれてたの。最近流行ってる、これ。眼帯してるのとか、絆創膏貼ってるのとか、ギプスして松葉杖ついてるのとか」

「……へえ」

最近の若者の趣味は分からないと思いつつ、俺は彼女の隣に腰掛けた。彼女はマスコットをいじる手を止めると、相変わらず声は出さずに笑った。

「包帯しても眼帯しても絆創膏貼ってもギプスしても、痛いのは変わらないのにね」

ちょうどその時、薬局から二人同時に名前を呼ばれた。

「今更だけど、シンドウさんって中学何年？」

帰り際、マフラーを巻いている彼女に尋ねると、

「中学三年。本当は受験生。来年はフリースクールに行く予定」

俺の次の質問も見越したような回答が返ってきた。俺は思わず苦笑する。彼女の言葉は常に簡潔で率直で、だからこそ分かりにくい時もあった。

――しかし、中学三年生か。十二歳差か。さっきの熊のマスコットといい、ジェネレーションギャップを感じる。

そんな俺の心情を察しているのかいないのか、マフラーを巻き終わった彼女はこちらを見あげてほほ笑んだ。……彼女の笑顔には、

『無邪気さ』がなかった。かといって、邪気があるわけでもない。どこか空っぽに見える、笑顔。

「山寺さんは、三十前？」

「……二十七」

「うん。そのくらいに見える。老けてない」

――これは、褒められているのだろうか。先ほどから苦笑してばかりの俺と、空っぽの笑顔を張り付けている彼女。周囲から見たら、どんな関係に見えるだろう。

そんなことを考えていたら、間抜けな電子音が俺のズボンのポケットから響いた。俺は慌てて携帯を取り出す。メールではなく、電話。かけてきたのは、――高田望だった。

「もしもし？」

メールはともかく、彼女が電話してくるのは珍しい。いや、初めてかもしれない。俺は若干緊張しながら、声を出した。

『あ、もしもし山寺君？　いま大丈夫？』

「ちょっとだけなら。なんなら後で、こっちからかけ直すけど」

シンドウさんの方に目をやりながら、俺は小声で返事する。シンドウさんは俺の方ではなく、黒いコードでぐるぐる巻きにされているイチョウの木を見ていた。

望は『ううん、すぐに済むから』と前置きした後で、

『直接会って話したいの。山寺君の都合のいい時、ないかな』

「……直接？　今じゃなくて？」

『――直接がいいな。私、電話嫌いだし』

ああ、だから彼女はいつだってメールだったのか。そんなことを思いつつ、俺は自分の頭の中にあるスケジュール帳を確認する。……通院日以外、これといって用事はなかった。むしろ、仕事をしている彼女の方が忙しいはずだ。

「望の都合に合わせるよ」

そう言われるだろうと想定していたのか、望はすぐに言葉を返してきた。

『明日の夕方とか、どう？』

「大丈夫だよ。駅前でいい？」

『うん。それじゃ、また明日』

電話を切ると、シンドウさんと目があった。イチョウの木を見ていたはずの彼女は、いつの間にかこちらを見ていた。

「大切な人、から？」

彼女にとって、『大切な人』の定義はなんだろう。

家族か、友人か、それとも。

「――まあ、そんなところかな」

俺が困ったように笑うと、彼女はふっと息を吐いた。それから、

「本当に変な人。でも、嫌いじゃない。――好き、かもね」

それだけ言うと、一人でさっさと歩き始めた。その後ろ姿が『ついてこないで』と言っているような気がして、俺は呆然と立ち尽くした。

2か月半前　（2）

望との待ち合わせ場所は、駅前のファミレスだった。社会人として、もっとお洒落な場所……せめてカフェで待ち合わせしろよと思ったが、『ファミレスがいい』と言ってきたのは望本人だった。

昔と変わってない。そう思った。

テーマパークや映画館を好んでいた同級生に対し、望がデートの時にいつも行きたがったのは近所の公園だった。小規模の割に、遊具だけは豊富にある公園。望はその中でも、大きなスプリングの上に馬の模型をくっつけたような遊具（もの）を特に好んでいた。

「わざわざメリーゴーランドになんて乗らなくても、これで十分だよ」

公園の近くにあるコンビニでコロッケを買い食いして、たわいもない話をして。

そんな時が何よりも幸せなのだと、いつも言っていた。

――彼女にとって大切なのは、コーヒーが『ドリンクバー』なのか、『豆から挽いたもの』なのかではなく、……俺と共有する時間そのものなのだろう。

「ごめん、待たせちゃったね」

彼女が店に入ってきたのは、約束の時間ちょうどだった。俺は首を振る。

「俺が先に着いただけだよ。それより、なにか食べる？」

「うーん。とりあえず、飲み物だけでいいや。山寺君は？」

「俺も飲み物だけでいい。腹が減ったら、なんか注文するよ」

彼女は向かいの席に座ると、ドリンクバーを二つ注文した。俺はさりげなく、彼女の姿を確認する。俺が休職する前、ショートボブだったはずの彼女の髪の毛は、いつの間にかすっかり伸びている。長さは、肩と腰の中間くらいだろうか。少しだけ染めているらしく、若干赤みがかっている。――それ以外は、何も変わっていなかった。

ナチュラルメイクを通り越し、薄化粧とすら言えないくらいの化粧。顔は、猫で例えるならアメリカンショートヘア。可愛くて、けれど賢そうに見える。残念なのは、近視用の眼鏡が酷く似合っていないことだけだった。

「――……山寺君、変わってない」

「そうか？」

「そうだよ。高校の時と一緒。老けてないよ」

この前シンドウさんに同じことを言われたのを思い出し、笑ってしまった。望が首をかしげたので、なんでもないよと手を振る。しかし、ツボに入ってしまったらしく、笑いが止まらない。彼女はし

ばらく俺の笑う様子を見守り続け、

「――……よかった。笑えるようになったんだ」

やがて、ぽそりとそう言った。そこでようやく、俺は笑うのを辞める。

「本当に迷惑掛けたな。ごめん」

「心配かけたな、にしてくれる？　迷惑っていうと、君の存在が邪魔みたい。それは嫌」

望はそう言うと、ほほ笑んだ。

シンドウさんのそれとは違う、柔らかな笑みだった。

俺はカフェオレを、彼女はミルクティーを飲む。なんとなく気まずい沈黙。彼女は机に張り付けられた期間限定メニューを見ていたが、しばらくすると意を決したように顔をあげた。

「あのね、山寺君」

「……うん？」

「今、好きな人っている？」

単刀直入。俺は口に運ぼうとしていたカフェオレのカップを、机の上に置いた。

――好きな人と言われて、シンドウさんの姿が浮かんだ。それが

俺の答えで、でも言えなかった。
十二歳差、相手は中学生。そのことがどうしても、俺の中で引っ掛かっていた。

「……好きな人、いない？」

少しだけ上目遣いで、両手を膝の上に置いて、気まずそうに彼女が訊いてくる。俺はテーブルの端に立てかけてあるメニュー票を横目で見ながら、

「――付き合ってる人はいない」

半分隠した答えを返した。勘のいい望なら、恐らくその意味が分かっただろう。けれど彼女は続けた。

「……高校生の時、すごく後悔した。どうして君の手を放しちゃったんだろうって」

彼女の言葉も姿勢もまっすぐで、俺はそれに反比例するように猫背になった。後ろめたい。その言葉が一番しっくりくる気がした。

「今回のこともそう。会社を休む前に。もっと早く気付いてあげられなかったのかって、思った」

「――それは」

「私ね。まだ好きなんだ」

軽くめまいを感じる。どうしてこいつは、いつだって真っ直ぐなんだろう。付き合っていたあの頃、よくそう思った。そして、今日も。

「山寺君の、――高志のこと、まだ好きなんだ。馬鹿みたいだよね。中学生みたいだって笑ってくれていいよ。でも、まだ好きなの。……ねえ、」

彼女はまっすぐにこちらを見る。俺は、笑えない。

「私たち、もう一度やり直せないかな」

笑えなかった。

一人で歩く商店街は、酷く寒かった。

結局二人とも、何も食べずに外に出た。「呼びだしたのは私だから」と、俺の分のドリンクバー代まで望が払ってくれた。正直、自分が情けなかった。

すぐに答えを出せなかった。

彼女を受け入れることも、断ることもできずに、曖昧な返事でごまかした。

「待ってるから」

そう言ったのは彼女の方だった。

「返事、待ってる。急いでないから。友達としてでも、いいから。――ただの同僚、よりは格上げしてくれると嬉しいかな！」

最後の一言だけを明るい口調で言うと、望は駅に向かって歩き出した。俺は用事があるからと嘘をついて、ファミレス前で彼女と別れた。

駅前の商店街を、目的もなく歩く。

楽しそうな笑い声も、手を繋いで歩いている幸せそうなカップルの姿も、妙にわざとらしく見える。俺は両手をポケットに突っ込んで、猫背のまま無表情で歩き続けた。

包帯を巻いている熊のぬいぐるみが目について、ゲームセンターの前で立ち止まる。シンドウさんが鞄につけていた、例のマスコットだ。いろんな種類のそれが、ＵＦＯキャッチャーの中におさめられていた。

『包帯しても眼帯しても絆創膏貼ってもギプスしても、痛いのは変わらないのにね』

彼女の声を思い出しながら、俺は財布の中から百円玉を取り出した。

2か月前　（1）

骨折しているらしく、ギプスした右腕を三角巾で固定している。
――そんな熊のマスコットを、俺はシンドウさんにプレゼントした。二月の初め、世間がバレンタインで盛り上がり始めたころだった。
シンドウさんは怪訝な顔をして、熊のマスコットと俺を交互に見比べた。

「……どうしたの、これ」

「ゲーセンで、たまたま取れたんだよ」

ゲームセンターで取ったのは本当だが、彼女にプレゼントするために何度も挑戦したとは言えない。たまたま取れたなんて明らかに無理のある嘘だが、彼女は納得したのかすんなりと受け取ってくれた。おもむろに鞄を膝の上に乗せ、『包帯熊』の隣に『骨折熊』を取りつける。――なんともシュールな、鞄になった。

「ありがとう」

彼女が綺麗な顔でほほ笑んだので、俺も笑いかえした。待合室のテレビは、くだらないバラエティー番組の再放送を映し出していて、けれどもそのおかげで彼女の眉間にしわが寄ることもなかった。ニュースをやっていたら、俺がチャンネルを代えに行くところだ。

待合室で薬を待っている間、俺は近々転院することを彼女に伝え

た。復職したら、この病院には恐らく来れなくなる、と。

「転院、いつから？」

彼女が骨折熊をいじりながら、抑揚のない声で訊いてくる。その声は、寂しそうでも嬉しそうでもなかった。

「――四月から。三月いっぱいで、ここはやめる」

「じゃ、会えるのはあと二カ月ね」

これまた寂しそうだというわけでもなく、ただ事実を確認するだけの口調。俺は内心がっくりしつつ、彼女がいじっている骨折熊を眺めた。今にも泣き出しそうに見える熊の顔は、どこか笑っているようにも見えた。

「山寺さん、今日はこれから予定ある？」

病院帰り、いつものように手際よくマフラーを巻きながら、彼女が訊いてきた。俺は首を振る。

「じゃ、コーヒー。私がおごる。百円の、安いの」

「え、なんで？」

「別に。気分。私も飲みたいし。それに、お礼。……これ、たまたまでも百円でもないでしょ」

彼女は骨折熊を指差して、笑った。俺は頭を掻く。
――バレてたか。
実際、その熊を取るのに八百円かかっていた。

前回は紅茶を注文したバーガーショップで、ホットコーヒーを二つ注文した。相変わらず学生が多くて騒がしい店内で、彼女は顔をしかめ
「外がいい」
そう言ったので、結局この前行ったのと同じ公園へと向かった。

閑散としている公園で、二人ブランコに座ってコーヒーを飲んだ。今回、彼女はアップルパイを買っていない。……と思っていたら、紙袋からチョコパイが出てきた。いつの間に注文したんだろう。いや、そもそも、あの店にチョコパイなんて置いてあっただろうか。
「これ、期間限定。バレンタインの。便乗してみた。――半分いる？」
相変わらず、俺の心を見透かしたような彼女の言葉と簡潔な説明。俺はチョコパイを見ながら首を振る。
「いや、いいよ。半分にするのは難しいだろ？　それ」

このバーガーショップの『アップルパイの中身のこぼれやすさ』は、俺の人生の中で堂々の一位だった。恐らくチョコパイも、似たようなものだろう。半分にするために手で千切ったら、悲惨なことになりそうだ。

彼女はチョコパイに目をやり、「それもそうだね」と返事をすると、小さな口で一口かじった。両手でパイを持ち、ちまちま食べるその様子は、まるでリスのようだった。

「……俺も中学生の時はよく、学校帰りにハンバーガーとか食べてたなあ。友達四人で、チーズバーガー五十個頼んでみたりしてさ。——俺も、『騒がしい学生』の一人だったよ。色々と馬鹿なことやった」

俺が笑うと、彼女の手が止まった。無表情のまま、こちらに目を向ける。

「——……いつ？」

「え？」

「あなたが『変わった』のは、いつ？」

目を見開く俺と、表情を変えない彼女。目の色は相変わらず、茶色と焦げ茶色の間、——深い茶色。

視線はやがて、俺からチョコパイへと戻った。

「あなたが通院し始めた。それよりずっと前。違う？」

彼女の言った単語を、頭の中で組み立て直す。

『あなたが通院し始めた二年前。あなたが壊れたのは、それよりももっと前。違う？』

――ああ。多分、俺が『壊れた』のは高校生の時だろう。
両親が通り魔に襲われて殺されたあの時から、俺は変わった。
壊れたとも、破滅したとも言える。

彼女は俺の返事を待たずに話を続けた。相変わらず、抑揚のない声色で。

「本当は、あなたは『そういう人間』じゃなかった。何かあった。そして変わった。……戻りたい？」

「それは、過去に戻りたいかってこと？　戻りたいよ」

気づけば、彼女のことを睨んでいた。彼女はひるまない。俺は湧き上がってくる言葉を、取捨選択せずにそのまま口にした。

「あの日に戻って、両親には外に出るなって言いたい。犯人を刺し殺したい。俺の親を殺したのと同じ包丁で、あいつの喉を切り裂きたい。――いや。あいつじゃなくて、あいつの家族を」

「できないよ」

言葉を遮られてようやく、我に返った。急に感じる右手の痛み。いつの間にか、持っていたホットコーヒーのカップを握りつぶし、

中身を思いっきり周囲にぶちまけていた。コーヒーのかかった右手は若干赤くなっている。彼女は鞄の中からウェットティッシュを取り出し、俺の方に差し出した。

「――俺が、あいつを殺(や)れないって？」

「そうじゃない。過去には戻れないってこと。今を生きるしかない。受容して。もちろん、全てを受け入れろって言ってるんじゃない。そんなの無理。神様だって、受容できないものはきっとたくさんある。そんなものなの。この世界は」

ウェットティッシュを受け取ろうとしない俺を見て、彼女はため息をつくと立ち上がった。いつの間にか、チョコパイは食べ終えている。

「――……だから、両親の幽霊は見えるかって訊いてきたのね。あの日」

彼女はウェットティッシュを、俺の右手にあてがった。ひんやりとしたティッシュ、それとは対照的な彼女の手の温かさに、どきりとする。

「山寺さん。前にも言ったけれど、私には見えない。幽霊、二週間で消えちゃうから。あなたの両親の幽霊は、私には見えない。でもね」

深い茶色が、こちらを見据える。すこしだけ歪んだ、その瞳で。

「あなたの現状を、悲観していない。――誰も」

彼女の言葉に、俺は息をのんだ。

2か月前　（2）

会社にも行けなくなり、精神科通い。まともに食事もとらず、風呂にも入るのも億劫。一晩中声を押し殺して泣いて、朝になってようやく眠る。そんな生活。

自分が『こうなった』原因を、全て他人に押し付けようとした。

仕事のストレスによる、鬱病。でもきっと、それだけじゃない。

高校生のころから抱えてきたものが、破裂した。きっとそうだ。

――犯人を殺してやろうかとも考えた。

天井の一点を見つめて、数時間を過ごす。馬鹿みたいに。ただただ時間を浪費して、死ぬのを待つ。包丁を見つめながら、それで犯人を刺し殺す自分を、そのあと自決する自分を想像する。笑う。

そんな俺のことを、死んだ両親はどう思っているのだろうかと考えた。

「心配は、してると思う」

目の前に立っていたはずの彼女は、俺の隣のブランコに座りなおしていた。彼女は俯いたまま、ブランコを少しだけ揺らす。彼女の

言葉も、揺れる。

「でもね、山寺さん。親は、子供のことを簡単に諦めない。そういうものなんだって。……多分、山寺さんの親も、そうだと思う。会ったことは、ないけど。あなたの親は、きっと」

あなたの、親は。

彼女の言葉には、どこか棘(とげ)があった。何かを、責めるような。けれどそれは、俺に向けられたものではなくて、もっとどこか、――別の。

「――私は世間知らずだし、あんまり言えない。えらそうなこと。でも、これだけは言いたい」

ブランコの揺れが止まると、時間も一瞬だけ止まった気がした。無表情、けれどもどこか寂しげな彼女と目が合う。深い茶色の瞳。それはまるで、

「山寺さん。――あなただけは、自分(あなた)のことを諦めないで。味方でいてあげて」

なにもかもを見透かしたような、けれど何も見ていないような、そんな色をしていた。

冷たい風が通り過ぎて、俺はそこでようやく現状を把握した。彼女は中学生で、辺りは真っ暗だ。……とりあえず今日は、家に帰さないと。

俺は立ち上がり、彼女に手を差し伸べようとして、――右手が軽く痛むことに気がついた。そういえば、右手に思いっきりホットコーヒーをこぼしたんだった。多少、火傷したのかもしれない。俺は差し伸べていた手をポケットに突っ込み、彼女に向かって笑いかけた。

「ごめん、送っていくよ」

彼女は俯いたまま、首を振った。紺色のマフラーをしっかりと巻き直して、こちらを見上げる。

「帰れるから。大丈夫、私は一人で」

「いや、危ないし送るよ。ここら辺、結構物騒だから」

「本当に大丈夫。慣れてるから、こういうの。家、ここから近いし」

彼女は立ち上がると、鞄を肩にかけた。新品のように見える、スクール鞄。それはきっと彼女が丁寧に扱っているから、――ではなくて。

「……君の味方は？」

鞄につけられている骨折熊と包帯熊を見ながら、俺は尋ねる。既に歩きはじめていた彼女が、こちらを振りかえった。

綺麗なスクール鞄。それはきっと、――あまり使われていないか

ら。

学校に、君の居場所は？

君の、味方は。

「……さあ？」

彼女ははぐらかすように笑い、肩をすくめた。

「私の味方、か。少なくとも、家にも学校にもいない。――ううん、拒絶してるだけかもね。私が」

「だったら、」

俺が君の。そう言いきる前に、彼女はこちらに手のひらを向けた。

これ以上何も言うな、の合図。

口をあけたまま絶句する俺に、彼女はうっすらと笑いかけた。

「言ったよね、いま。拒絶してるの、私。だから、いい」

それに、と彼女は付け足す。

「山寺さん、『大切な人』がいるでしょう？」

「それは……」

「私は大丈夫。慣れてるから」

風が、シンドウさんの長い髪を揺らす。彼女は目を細めた。

「――夜道を一人で歩くの、私は慣れてるから」

それだけ言うと、彼女は踵を返した。

自宅に向かって歩き始めた俺の足を止めたのは、携帯の着信音だった。

望からではない、とすぐに分かった。

彼女は、返事を待っていると言った。恐らく俺が返事をするまで、連絡してこないだろう。望は、そういうタイプの人間だった。

案の定、着信は望からではなく、大学時代の友人からだった。電話ではなく、メール。

結婚するから式に参加してほしい、という趣旨の。

俺は返事をせず、携帯をポケットに突っ込み再び歩き出した。

「――……結婚、か」

友人の幸せを、素直に喜べない自分が鬱陶しかった。

俺が気になっている相手は、まだ法的にも結婚が許されていない。なんてことを考えて、俺はぶるぶると首を振った。

彼女にとって、俺はただの『通院仲間』に違いない。

『私たち、もう一度やり直せないかな』

望の言葉が、頭の中で自動再生される。――望のことを嫌いになったわけではない。いやむしろ、嫌いになっているのなら、こんなにも悩まない。

悩んでいるのは、俺がいまだに彼女のことを好きだからだろう。

「……おっかしいな。俺、浮いた話とは無縁のはずなんだけど」

俺は頭を掻きながら、家の扉を開けた。

一人暮らしにしては広い家。

高校二年生のあの日までは、三人で暮らしていた家。

そう。この家は、三人で住むにはちょうどいい広さだった。

広い家に一人でいると、孤独が浮き上がる。空気中から寂寥感だけが分離して、身体中を支配する。

それでも、俺がこの家に住み続ける理由。

台所に立つ母の姿が、新聞を広げながらテレビを見ている父の姿が、見えるんじゃないか。

二人はまだ、ここにいるんじゃないのか。

そんな気が、したから。

『幽霊、二週間で消えちゃうから』

抑揚のない彼女の声が、頭をかすめた。

1か月半前

望とファミレスで話をしてから、一カ月近くが経とうとしていた。いまだに、あの日の返事をしていない。どうしたものかと考えながら、俺は精神科の待合室でテレビを観ていた。冬にしては珍しく、心霊特集をやっている。――といっても、夏にやっていた番組の再放送だが。子供だましのような、作り話としか思えない『実話』が次々と出てくる。わざとらしく悲鳴を上げるアイドルに、俺はため息をついた。

「山寺さん、観るんだ。そういうの」

背後、……というよりも頭上から声が聞こえてきて、俺は思わずのけぞった。

俺の後ろに立っていたのは、やっぱりシンドウさんだった。今日は制服姿ではなく、灰色のセーターの上に、黒のダッフルコードを羽織っている。

子供だましとしか思えない番組を観ていたことが恥ずかしくなった俺は、頭を掻いた。

「……観てたというか、たまたまこのチャンネルがついてただけだよ」

「そう」

彼女は特に躊躇(ためら)いも遠慮もせずに、俺の隣に座ってくる。俺は少しだけ彼女から距離をとって座りなおし、視線をテレビに戻した。

何年も前に別れた彼氏が生き霊になってあなたに憑いている、そんなことを霊能力者が至極真面目に話しているところだった。

「生き霊って、いるの？」

ふと思いついてシンドウさんに尋ねてみると、彼女は首を振った。

「分からない。私は見えたことがない」

「……死後二週間で、幽霊は『消えちゃう』んだって言ってたね。それってどんな感じなの？　だんだん透けていって、見えなくなる感じ？」

俺の言葉を聞いたシンドウさんは、黙りこんだ。

そんな彼女の様子を見て、興味本位で訊きすぎてしまったと後悔した。彼女としては、嫌な話題かもしれないのに。

しばらくしてから、シンドウさんは自然な動作でこちらを見た。考えが纏まった、――そんな顔をしていた。

「口の中。口内炎ができたとして」

「は？」

「口内炎。痛いやつ」

彼女が真面目な顔で口内炎と連発したので、俺は「はい。口内炎ですね」と真面目な返事をしてしまった。

「口内炎ができてる時は、気になる。痛いし。とんかつを食べるのが嫌になる。ソース、しみるし。サクサクのとんかつって、ささるし」

「うん」

「でも、いざ治ってみたら『口内炎ができていたこと』も『痛かったこと』も、しばらく忘れちゃうんだよね。あれ？　そういえば痛くないな……って気付いてようやく、治ってるんだって実感する」

「――まあ、そうかな」

「幽霊が消えちゃうのも、口内炎と一緒なの。見える間はすごく気になるのに、見えなくなったら、しばらくの間はその存在すら忘れちゃうような。そんなもの。案外」

「……ふーん」

そんなものなのだろうか。

人が死んでしまったら、生きている人間はしばらくの間でも、死んだ人間に『支配』される。故人との思い出にふけるようになる。

――同じ場所に行きたいと、思うようにもなる。なのに。

「幽霊は口内炎なのか」

俺が苦笑すると、彼女はいつものように熊のマスコットをいじり始めた。

「たとえが悪かったかも。分かりにくかった？」

「いや、分かりやすかったし面白かったよ」

「ならいい。――あと、一ヶ月半ね」

いきなり話題を切りかえられて、俺は首をかしげる。彼女は包帯熊の首を、俺と同じようにかしげてみせた。

「病院。違うところに移っちゃうんでしょ。この病院で山寺さんと会えるのは、あと一ヶ月半」

「――……ああ、そうだね」

彼女は俺の顔を一瞥して、すぐに包帯熊へと視線を戻した。それから、

「嬉しくなさそう」

憮然と、というよりも、ただの無表情と言った方がいいのかもしれない。表情こそ変わらないが、いつもよりも少しだけ機嫌の悪そうな声で、そう言った。

「――そうかな」

「無理してる？　復帰するの。本当は、嫌？」

「そんなことは、ないよ」

俺はテレビ画面に目をやりながら、笑顔を作る。

インチキとしか思えない心霊番組は、インチキとしか思えない霊能力者によって、アイドルに憑いている（らしい）生き霊を除霊し

ているところだった。「彼女から離れなさい」と責めたてる霊能力者、ボロボロと涙をこぼすアイドル。――この番組お決まりのパターンだな、とぼんやり思った。

俺はもう一度ため息をつくと、彼女の方を見て笑った。

「まあ、緊張はしてるかもしれないね。なにせ、二年ぶりだし。復帰する前に一度くらい、挨拶に行こうとは思ってるけれど」

「……そう」

テレビからは執拗に、「これ以上彼女を苦しめるな」と叫ぶ霊能力者の声が聞こえてくる。

――これ以上、苦しめるな。

会社に復職のあいさつに行く時、俺は望に返事をするつもりだった。気が重いのは、――重いように見えるのは、きっとそのせいだろう。

「……私は今日、さぼったの。学校」

彼女は熊のマスコットをいじるのを辞めて、テレビの方を見ながら言った。

「行くの、嫌だったから。もうすぐ卒業なのに、わざわざ休んだ。あとちょっとなんだから、我慢しろって思うでしょ。でも親は何も言わないの。……きっと、私とどう向き合えばいいのか分からないのね。私は腫れものだから。出来れば、見たくないような」

「……寂しい、の？」

男が女に「寂しいか」と訊くのは、ある意味下心がある。ただこの時は、他の言葉が思い浮かばなかった。

彼女はこちらを見ると、諦めたように薄く笑った。

「大丈夫。慣れてるから、そういうの」

――慣れてるから。

それは彼女の口ぐせのようで、けれども彼女がそれを言う時、俺はいつも思う。

それには慣れないでほしい、と。

「お待たせしました、シンドウさーん」

薬局に名前を呼ばれた彼女は立ち上がると、

「一ヶ月半は、短いね」

俺を見下ろしながらそれだけ言い残して、消えた。

1か月前

変な夢を見た。俺の両親が、殺される夢だ。
気味の悪い夢を見たなと思いつつ、俺は上半身を起こした。目をこすりながら、カレンダーを確認する。

「にせんいちねん、じゅうにがつ、じゅういちにち」

棒読みで、その日付を確認する。何度も何度も。

下に降りると、いつものように母が朝食を準備していた。お世辞にもうまいとは言い難い、そぼろのようなスクランブルエッグ。ぐずぐずに崩れたトマト。それを気にする風でもなく、新聞を読みながら朝食をとる父。

――ごめんね、食パン買うの忘れてて。今日はご飯よ。

母の言葉に、俺は笑う。だったら卵焼きと味噌汁にすればよかったじゃん、と言いながら席についた。スクランブルエッグを作ってから、パンがないことに気付いたのよと母。そんな母の笑顔を見ながら、俺は思い出したことを口にした。

――あ、そういえば。今日、変な夢を見たんだ。

へえ、どんな夢？　と楽しそうに訊いてくる母。……まさか、二人が殺される夢だとはいえない。

——詳しくは言えない。でもさ、今日一日、外に出るのは控えた方がいいかも。

——どうして？

——うーん、なんとなく。

俺がはぐらかすと、母は困ったように笑った。

——今日はね、お父さんと出掛ける予定があるのよ。高志が高校（がっこう）から帰ってくる頃には、お母さんたちも帰ってきてると思うけど。

母は困った顔のまま、スクランブルエッグを食べ始める。俺は少し水っぽいご飯と、……その日付をもう一度口にした。

「にせんいちねん、じゅうにがつ、じゅういちにち」

――……これで何度目だ、とため息をついた。布団の中でもそもそと携帯を開き、今日の日付を確認する。そしてそれを、わざと声に出した。

「二〇一二年、三月、二日」

……夢の中でくらい、「今日は外に出るな」ときちんと忠告すればいいのに。俺は布団からさっさと抜け出すと階段を降り、台所を確認した。

――父も母も、不格好なスクランブルエッグも、なかった。

自分で、スクランブルエッグを作る。ふわふわに仕上がったそれは、どう考えたって母の作ったそれよりも上手い。――けれど。

三人で食べた不格好なスクランブルエッグの方が、よっぽど美味かった。

「山寺さん。あと一カ月ね」

俺の顔を見るなりシンドウさんがそう言ってきて、思わず苦笑した。ここのところ、顔を合わすたびに復職までの日数を、……彼女と会えなくなるまでの日数をカウントダウンされている。シンドウさんにとってそれは、嬉しいことなのか、残念なことなのか。彼女

の表情からは、それを読み取ることができない。
待合室のテレビを確認する。「中学二年生　同級生を刺殺したのち自殺」というテロップと、映し出されている建物を見て、俺はチャンネルを代えた。

「どちらが悪かったのか」

彼女はテレビを凝視したまま、声を出した。チャンネルが代わったことに、気付いていないようにも見えた。

「いじめられてた子が、自分をいじめてた子を殺して、そのあと自殺したんだって。……誰が悪いの？」

どこか責めるような、彼女の声。俺は彼女の方に目をやる。深い茶色の瞳が、少しだけ濁っているように見えた。

「いじめられたら、我慢する。そしたらすべてが丸く収まる？　……壊れるよ、確実に」

「――君は、」

俺の声を遮って、シンドウさんは急に笑いはじめた。声を出して、酷く楽しそうに。
彼女のそんな姿を見るのは初めてで、俺は唖然とした。
シンドウさんはひとしきり笑うと今度は無表情になり、何度も繰り返し覚えさせられた台本を読むかのように、声を出し始めた。……まるで、念仏でも唱えるかのように。

「我慢してはいけません。誰にも言ってはいけません。やりかえし

てはいけません。見て見ぬふりしてもいけません。手を差し伸べてはいけません。標的にされてはいけません。負けてはいけません。折れてはいけません。勝ち負けではありません。黙っていては分かりません。声を出してはいけません。嘘つきの話は聞きません。泣いても何も解決しません。泣くのを我慢してはいけません。何もしてはいけません。――死んでください」

……彼女は息継ぎしたのだろうか。そんな間抜けなことを考えてしまうくらいに、彼女は早口で最後まで言いきった。

茫然としている俺の方にちらりと目をやったシンドウさんは、いつも通りの澄ました顔をしていた。

「いまの全部、直接言われたこと。本当の話。びっくりした？　……引いた？　山寺さん。私、壊れてるの。怖かった？」

彼女の試すような目を、俺は見つめる。――怖かったのは俺ではなくて、

「それを言われて、怖かったのは君だろう？　……他人を、拒絶したくなるくらいに」

ほんの少し、ほんの一瞬。彼女の顔が歪んだ。

俺の言葉に、いや、自身の言葉にシンドウさんは反応した。

いつか、彼女が言っていた言葉。

『拒絶してるの、私』

「――……俺のことも、拒絶する？」

怖がらせないよう、出来る限り柔らかい声で、彼女に尋ねる。

コーヒーをこぼした右手の痛みは、すっかりなくなっていた。……『消えちゃう』のも、こんな感じなのかもしれない。いつの間にか、いなくなっている。それはとても、

「こわい」

口にした言葉。その感情を乗せた声。いつもは平坦な彼女の声が、震える。

「分からないの。人を信用していいのか。大丈夫なのか。私（じぶん）のことも分からないのに。私は、夜道に慣れてるの。その道をいきなり照らされても、めまいがして倒れるだけ。こわい」

「シンドウさーん。第二診察室へどうぞー」

診察室に呼ばれた彼女は立ち上がると、

「ごめんなさい。拒絶じゃないの。でも、――分からない」

俺の方を見ずにそう言って、診察室へと向かった。スクール鞄につけられている熊のマスコットが、彼女の歩調に合わせて跳ねる。その様子を見ながら、望もああいうマスコットが好きなんだろうかと考えた。

――近々、復職の挨拶に行こう。会社に行こう。きっと、望にも

会えるはずだ。

次に望(かのじょ)にあった時。
その時は、ちゃんと言おう。

あの夢のように、後悔しないためにも。

2週間前　（1）

病院に入ってすぐ、俺はシンドウさんを探した。
まだ来ていなければ、来るまで待とう。もしも今日会えなかったら、一週間後にまた来よう。俺の診察は二週に一度だけど、彼女の診察は週一だと言っていた。なら、来週でも会えるはずだ。
そんなことを考えながら、俺はさほど広くない待合室を覗いた。

彼女は、いた。

前にも見た、ダッフルコート。今日の彼女は私服姿だが、『いつもの鞄』を膝の上に置いている。熊のマスコットが二つ付いた、スクール鞄。手持ち無沙汰なのか、それとも癖なのか、いつものようにマスコットをいじっていた。
彼女の他に待合室にいるのは、中年の男性一人だけだ。彼女の向かいの席に腰掛けて、熱心に週刊誌を読んでいる。

俺は無言で近づくと、彼女の隣にそっと腰掛けた。『誰かが隣に座ったこと』に気付いた彼女が、ちらりとこちらに目を向ける。それから、

「山寺、さん」

何かに怯えるような顔をした。

……前に会った時は、嫌な別れ方をした。

けれど俺は、二週間前と同じセリフをわざと繰り返した。

「シンドウさん。――俺のこと、拒絶する？」

彼女は今にも泣き出しそうな顔で、けれど小さく首を振った。

「……会社に、挨拶に行ったんだ。復職のね」

俺が笑うと、彼女は「そう」とだけ返してきた。感情のこもっていない、――いや、わざと感情をこめていないような口調だった。

……彼女は一体どれくらいの年月を、そうやって過ごしてきたのだろう。

隠して、疑われて、――拒絶されて。

感情のない、そんなふりをして。

俺は頭を掻くと、彼女に頭を下げて言った。

「今日は、会えないかと思ってた。本当にごめん」

「……別に。謝らなくていい。謝るの、私だし。この前はごめん。拒絶じゃないとか言っておいて、逃げた。診察室に」

彼女まで頭を下げてきたので、俺は慌てて首を振った。彼女に謝らせるつもりなんてなかった。それに、

「そうじゃないんだ。それじゃなくて、俺が言いたいのは――」

「いいってば。『それが普通』なんだよ。普通はそうなの。あなたが謝る必要ない。あなたの考えは、反応は、普通だったよ」

かみ合っていないようで、かみ合っている言葉。二人にしか分からない、会話。

俺達の向かいに座っていた男性患者が、ちらりとこちらを見た。週刊誌を読んでいるふりをしながら、時折顔をあげて、こちらを観察しているのが分かる。

そのことに、シンドウさんも気づいていただろう。けれども彼女はそれを気にせず立ち上がると、テレビのチャンネルを変えた。『大型トラックとバス激突　死傷者八名』の事故現場を映し出していた画面が、陽気なＢＧＭとともに子供向け番組を流し始める。音楽に合わせて、パチパチと手を叩く子供たち。

ソファーに座りなおした彼女は、大きなため息をついた。

「酷い番組。楽しくない」

きゃっきゃと騒ぐ子供たちは無邪気で、けれどそれが悲しかった。

その日のシンドウさんの診察は、いつも以上に時間がかかった。——彼女はいま、精神的に不安定になっているのかもしれない。俺は体をゆすりながら、彼女が帰ってくるのを待った。彼女を待っている時間が、妙に長く感じられた。

三十分ほどで待合室に帰ってきたシンドウさんは、いつもの顔つきに戻っていた。無表情の仮面をつけた彼女はこちらを見て薄く笑い、それからいつもの、

「山寺さん。あと、二週間」

カウントダウン。

「――ああ、そうだね」

俺は苦笑する。彼女はきっと、最後までこのカウントダウンを辞めないだろう。――いや、彼女ではなくてこの世界が。この世界が、カウントダウンを辞めることはない。彼女はそれを、言葉にしているだけだ。

シンドウさんは薬局で、一週間分とは思えない量の薬を受け取ると、

「ここはいや。外がいい。テレビ、嫌いだから。外に出よう？」

そう言って、さっさと外に出た。俺は彼女の後に続く。病院帰りにいつも歩く歩道は、今日に限って人通りが多くて、彼女は顔をしかめた。大学生の男女混合組が大きな声で笑うのを聞いて、

「――うるさい。笑い声、嫌いなのに。あの公園も、今日は人がいるかもしれない。だとしたら面倒。……本当にうるさいね、今日」

周囲の人に気を遣う風でもなく、いつも通りの口調でさらりとそんなことを言った。数名が、彼女の方を振り返る。けれど、誰も何も言わない。

「山寺さん、時間は大丈夫？」

「え、ああ。俺は」

「だったら、うち。来て」

彼女の言葉を聞いて、俺はその場で凝り固まった。
『うち』って、シンドウさんの家のことか？

「え、いや、でも」

「大丈夫。両親、家にいるけど。どうせ私のこと、気にしてない。いや、気にしてるけど、腫れものの私に触れようとしない。だから平気。私が今更、ちょっと変なこと言ったりやったりしたところで、あの人たちは動じないよ。慣れてるから」

それに、と彼女。

「山寺さん、私のこと襲ったりしないでしょ？」

「そりゃ、そんなつもりないけど」

「ね。外うるさいし、うちに来て。お茶もお菓子も出せないけど。――いいよね？」

俺も俺で、分かってた。
シンドウさんが、俺を『誘っている』わけではないってこと。

彼女はまっすぐこちらを見据えたまま、続ける。

「……なにか話があるんでしょう。私に。……いや。私に、じゃないか。私じゃない、誰かに。まあ、どっちでもいいよ。こういうの、慣れてる。――私についてきてくれる？」

俺の返事は待たずに、彼女はさっさと歩き出す。
そんな彼女の後ろ姿を、俺は懸命に追いかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4161z/

滲んだ世界で、見えない言葉を。

2011年12月24日11時51分発行